

はじめに

一国の宰相をはじめ武勲の誉れ高い将星など正史に名をとどめた人物の行実はいうまでもないが、豪商・豪農の伝記考証や史料調査もまた世に堆うずたかい。あるいは、ひところ盛行した自分史のころみも多い。前二者は社会に対する貢献を顕彰するために記述されるわけだし、後者は自己の存在理由への問いかけ抜きに綴られることはない。島崎藤村の『春』の結末の嘆声に倣っていえば「あゝ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい」というわけである。どちらももあらかじめ施されている過度の意味付与から自由ではないという点において共通するものがある。

それに対して、本書が考察の対象にした「福井家文書」とは、どのようなものであるのか。おおむねは一九一〇年前後から一九八〇年代半ばにかけての、すなわち明治末年から昭和期全般にわたる、家業にかかわる証書類が中心である。調査対象にした福井家は東京市京橋区本湊町（俚俗：鉄砲洲本湊町、現：東京都中央区湊一丁目）で三代にわたって貸地・貸家業を営んできた家だから、それらの書類は土地・家屋の図面や権利書、売買契約書、貸地・貸家契約書、火災保険証書、家賃簿の類が大半を占める。ただし、それらは疾とうの昔に実務上、法律上の意味

や役割を失効した紙反故である。本湊町に暮らしした福井家の人びとの日々のいとなみのなかからその時どきに産み落され、ばあいによってはかれらの生活を大きく左右した重要書類だったことに紛れはないが、いまとなつては単なる紙反故の堆積という他はない。

ということは、貸地・貸家をめぐる、かつての経済活動から解き放たれた痕跡だけがここには山積みされているということになる。それらの書類の整理、解読、分析を通じてあらたな歴史的、文化史的なコンテキストを抽出し、意味を編成することはわれわれの手に委ねられている。これほど魅惑的な仕事は滅多にあるものではない。こうした認識から、本書の企画はスタートしたのである。

幸か不幸か、近代になってからというもの、鉄砲洲本湊町という街は人びとの関心をほとんど惹かないで来た。〈東京散歩〉といったレトロ風味から自由な土地柄なのである。大がかりな都市計画の施行からも置き去りにされている。また、福井家の人びとはこの街で生活してきたごく普通の市民だったから、歴史の表面に顔を出すこともなく過ぎてきた。かといって、〈下町人情〉や〈ものづくり〉〈老舗〉幻想にも縁がない。いなせな〈お職人〉にもほど遠い。その反面、山積する資料群は取り扱い次第ではプライバシーにも抵触しかねない生々しい瘡蓋をもとどめているから、〈古拙〉を愛でる古文書の風合いにもほど遠い。

こうした手つかずの側面に引きかえ、福井家の人びとが携わった貸地・貸家業といった家業柄、町内に所有する地所をだれに貸すか、それらの土地のどこにどのような貸家を建てるかといった営業実態を反映して、資料はおのずからに街ぐるみの「住」の問題を浮かび上らせてくれる。福井家資料を辿れば、単に福井家一個の家の成り立ちにとどまることなく、鉄砲洲本湊

町という下町界隈の地域史・社会史への広がりをも手に入れることができるというわけである。それとは別に、昭和戦前期の当主の筆になる克明な当座預金勘定帳や普請記録、当主没後に寡婦によって記録された出納簿、家賃簿も残されているから、借家人たちをも含めた「衣」や「食」にかかわる実態をも抽出することができる。明治このかた鉄砲洲本湊町という一角に生きてきた東京市民のくらし向きと生活文化を、地域と時代の種々相とのつながりのなかで掬いとることができるといふことである。

本書の構成は、長尾論文を分水嶺に、おおむね前半と後半とに分かたれる。これを一言でいえば「福井家文書」へと、「福井家文書」から、とのアプローチと要約できよう。「福井家文書」へとは、現前する文書そのもの（エクリチュール）とどのように親和、交渉してゆくかという知のいとなみをいう。「福井家文書」からとは、所与の文書を観察、分析し、時代や社会全般のコンテキストのなかに押し戻してゆく所作（ディスクール）をいう。

こうしたふたつのアプローチは、整理を推し進めてゆく作業のなかでおもむろに醸成されてきた方向づけではない。当該資料に遭遇した当初の段階から論議を重ね、役割分担を行い、意図的に展開してきた方法意識に基づいている。

現に、本書には『東京でくらす』でもなく、『東京にくらす』でもなく、『東京をくらす』といういささか熟さないタイトルを冠してみた。この耳馴れない書名を選んだのは、東京という所与の都市空間のなかに生きた人びとのくらしを跡づけるばかりでなく、人びとによって生きられ、ひいては期待や憧憬や失意や落胆をも含めて消費されたはずの都市イメージをも考察の

園内に呼び込みたかったからである。別の角度からこれを言えば、〈東京〉を炊事や洗濯物の匂いのする下町の路地から立ち上がる東京像と、郊外電車の沿線に拓けた新しい住宅地から認識論的に振り返られる東京像とによって挟み撃ちにする。あるいは、日常のいとなみにおいて紡がれる都市観と、そこから逸脱する余暇活動の向こう側に立ち現れる都市観との落差や乖離、齟齬や分裂を測定する。こうした問題意識を措定して、あらためて都市〈東京〉を捉えてみたかったからである。

「江戸の地霊・東京の地縁」は、近世以来の地域史や人物誌を参照しながら、鉄砲洲本湊町という街の成り立ちと現況とを記述することを通して、この街に三代にわたって住み慣わしてきた福井家の人びととその生業のありさまをラフ・スケッチすることで、資料の起源を尋ね、マテリアルを計量し、その特性を考量しようとしたものである。あわせて、それらの資料を産み落した福井家の人びとのひととなりに遡及し、あるいは見かけの上では散乱しているとしかみえない資料相互間の位置づけを図ったものである。

「本湊町建て直し」は、五本の論考のなかでは資料そのものにもっとも忠実に寄り添い、その吟味と解説とに力を注いでいる。論述中で白眉なのは、関東大震災後の復興期におけるバラック（仮設住宅）問題を記述したくだりである。福井家は町内に住まう地主・家主だったが、そうした地主・家主は〈官〉が推進する帝都復興事業、とりわけ区画整理事業が完了するまで被災地の再建に非協力的で、住宅復興を遅延させる足枷になったといわれてきた。そうした通説に対して、焼跡の再建に取り組むケースを臨場感をもって跡づけることによって、むしろ積

極的に家作の築造や修復に勤しむ地主・家主の姿勢と息づかいとを街ぐるみリアルに描き出している。

「生きられたレジャー革命」は、市内各所の杜寺参詣、熱海の湯治や避寒、鎌倉の避暑、さらには綱島の別宅での休暇の過ごし方といった余暇活動を抽出する。その上で、震災後になされたこれらのレジャーの様態を考察する。それとともに、産業の進展による余暇活動の規格化と非労働時間に対する意識や生活様式の類似化、すなわち「レジャー革命」がドラスティックに進む時代の趨勢のなかに福井家のレジャーを据え直すことによって、ともすれば構造的変化のみに意を払ってきた従来の「レジャー革命」論に対して、そこに参加した主体の固有性、ひいては差異性を浮き彫りにしようとしている。

「郊外を拓き、郊外に住まう」は、「福井家文書」と同じ時期に郊外住宅地開発の一典型として誕生した「成城学園町」の成立の契機と経緯とを、成城学園に所蔵されている地所部資料と、地域住民たちの筆になる町会誌や住宅の展示販売資料から炙り出そうとしたものである。なかでも、この町の開発を主導した学園所蔵の資料群は未発表のものである上に、教育機関による宅地開発といった特殊性を帯びている。こうした開発主体と、在地地主や電鉄資本（さらには近傍に移転してくる映画資本）などとの協調／軋轢を掘り起すなかで、関東大震災後に開発された郊外住宅地が表象した快適な生活空間のイメージと、実際に街に住まった人びとの階層やそれに基づく生活意識を重層的に掬いとり、スリリングなものとなっている。

「川島忠之助のばあい」は、一連の作業工程の途中で発見されたものである。その意味からも、上述した他の論考のように所期のものではない。したがって、ここに収録するにはいささ

か躊躇^{ためら}われるものがあつた。ではあるが、小規模土地集積地主の貸地・借家経営という点で福井家のばあいと多くの共通根を持つている。その一方で、東京下町地域と山の手、貸地・貸家経営の専業者と兼業者といったさまざまな局面で背反する要素をも持ちあわせている。にもかかわらず、近代化の進展にともなつて地方から大量に流入する都市人口の受け皿として営まれたそれらの貸地・貸家経営もまた、「東京をくらす」といった問題を照し出す好材料と見なして、あえて収録することとした。

「福井家文書」は「宝の山」である。さきに「反故の山」といい、いままた「宝の山」というのは前後矛盾している。しかし、実務上、法律上ではもはや紙反故にすぎないが、近代の都市〈東京〉を捉えなおす上では多様な問題視角を提供してくれるマテリアルなのである。ごく粗っぽく箇条書き的に挙げて、関東大震災による被害状況の把握、〈民〉による震災復興の跡づけ、区画整理に代表される〈官〉による帝都復興事業の品隠^{ひんしつ}、郊外住宅地開発における住民たちの享受のありかたと旧市街の人びとのリアクション、戦時下における建物強制疎開（時代は錯綜するが、都市再開発という美名のもとに推し進められた一九八〇～九〇年代の地上げをも含めて）という名の街なみの破壊、東京大空襲による被災被害の実態、〈民〉による震災復興の歩みと〈官〉の賦課した苛酷な財産税とのせめぎ合いなどなど、「福井家文書」のなかに埋もれている近・現代都市〈東京〉の変貌を考えるための契機には事欠かない。

われわれが「福井家文書」という「反故の山」を前にして、もつとも興味をかき立てられたのは、そしていまもかき立てられ続けているのは、それらをいかに読みこなさうか、という

ことのようなのである。資料自体は雑多なマテリアルとして積み上げられている。まずはその無意味な堆積ぶりを捉える。その上で、それらを微分し、もしくは積分して、いくつかの群に分割し、意味の流れを汲みとり、整序して行く。「反故の山」を意味によって編み上げてゆく。こうした「読み」こそが快樂の源泉をなしているようである。それはまた、「反故の山」が「歴史史料」に変貌してゆく瞬間に立ち合う僥倖^{きやうしやう}に恵まれたということでもあつた。「宝の山」に入りながら、手を空しうして帰る」無念さに歯噛みするのは曾我兄弟であるが、われわれは「反故の山」が「歴史史料」に再生してゆく現場に居合わせた忝^{かたじけ}なさを噛みしめている。

「福井家文書」の史料としての活用ははじまったばかりである。他日を期したい。

なお、史料整理の目下の到達点として巻末に鈴木努の筆になる「解題」を、今後の研究の資に供するために別巻として「福井家文書」の「目録」を公刊することで、同学の方々への「お福分け」にすることとした。あわせて参照せられたい。

（塩崎文雄）